

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

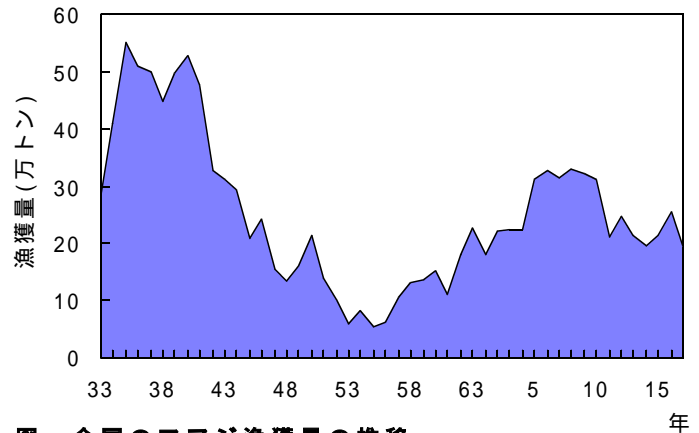


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、牛深沖、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、野間岬沖、立目崎沖、島間沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆・マアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）主体に1,300トンの水揚げで、前年の89%及び平年の101%でした。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ豆・マアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年並みで平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ1歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みで平年を下回ると考えられます。マアジ2歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みで平年を下回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年並みで平年を下回ると考えられます。

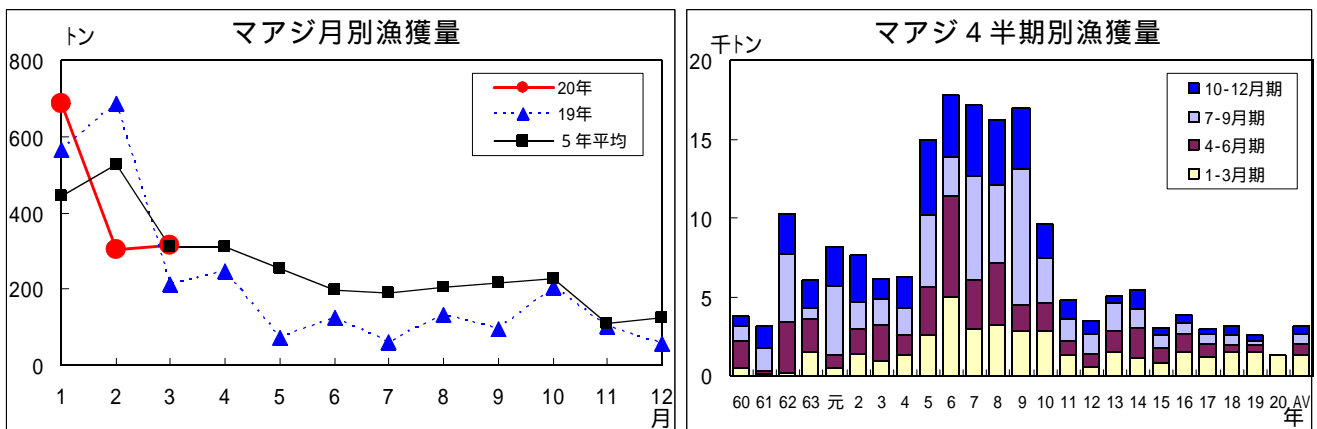


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年3月26日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンを一ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

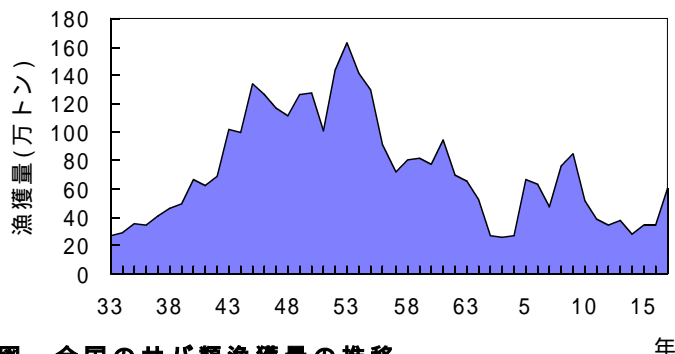


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、縄瀬沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、志布志沖、種子島東、馬毛島沖に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中(4歳魚・3歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体に4,296トンの水揚げで、前年の90%及び平年の132%でした。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中(4歳魚・3歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体に、ゴマサバ小(1歳魚：平成19年生まれ)も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年並みで平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ1歳魚は、太平洋ブロックの漁況予測から前年を上回る来遊量が期待されます。ゴマサバ2歳魚は、前期までの漁況から前年・平年を下回ると考えられます。ゴマサバ3歳魚は、前期までの漁況から前年を下回り平年並みになると考えられます。4歳魚は、卓越年級群で前年・平年を上回ると考えられます。

総合的に判断して、前年並みで平年を上回ると考えられます。

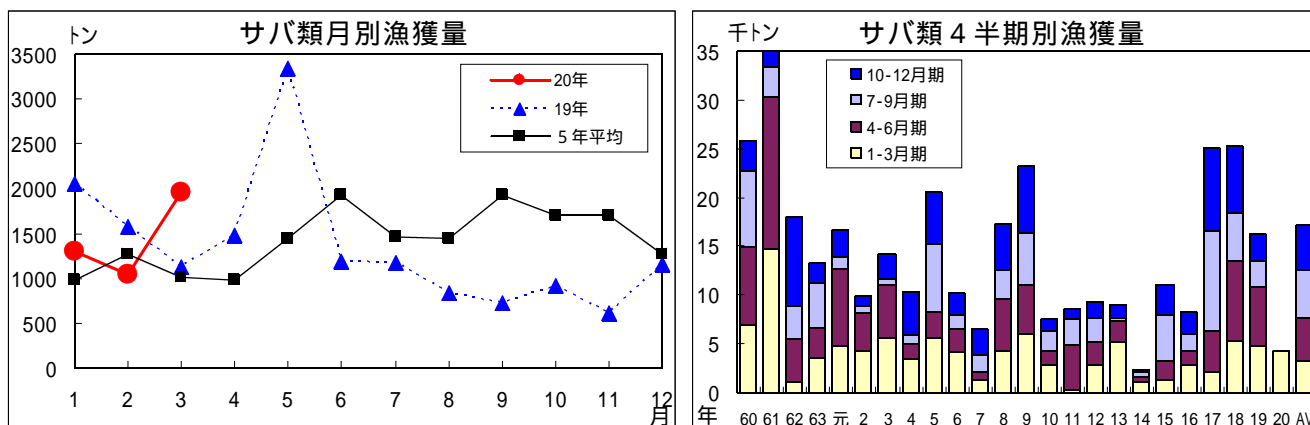


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成15～19年)の平均値,平成20年3月26日までの水揚量を使用。

[マルアジ (アオアジ)]

1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、19年は654トンとなりました。

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

平成20年1～3月は、主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では233トンの水揚げで、前年の71%及び平年の84%でした。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆・小(1歳魚：平成19年生まれ)で、マルアジ中・大(2歳魚以上)も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年、平年を下回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ豆・小(1歳魚)は、前期までの漁況経過から、来遊量は前年、平年を下回る水準です。マルアジ中・大(2歳魚以上)の来遊量は、前年並みで、平年を下回る水準です。

総合的に判断して、前年、平年を下回ると考えられます。

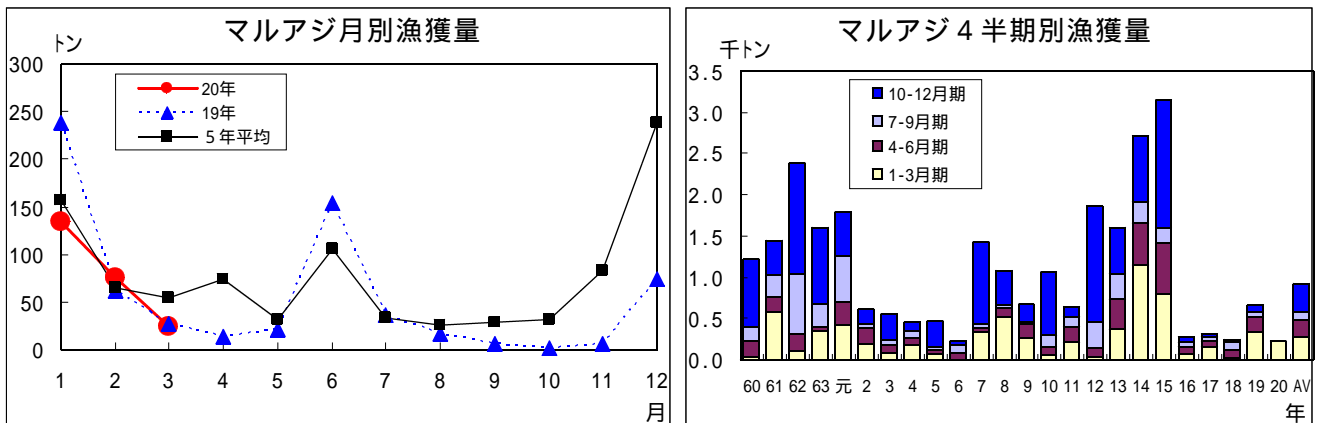


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

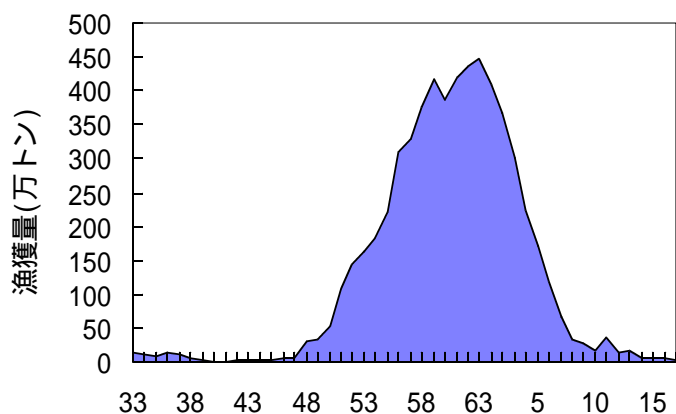


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

まとまった来遊は見られず、鹿児島県4港のまき網で7.0トン（前年比2%，平年比10%）と前年・平年とも大きく下回りました。北薩海域の棒受網でも0.4トン（前年比1%，平年比6%）と、前年・平年を大きく下回りました。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

散発的な来遊にとどまり、前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあり、また昨年春季に見られた1,2歳魚の鹿児島県海域への来遊が現在のところ見られないことから、散発的な来遊にとどまると考えられます。

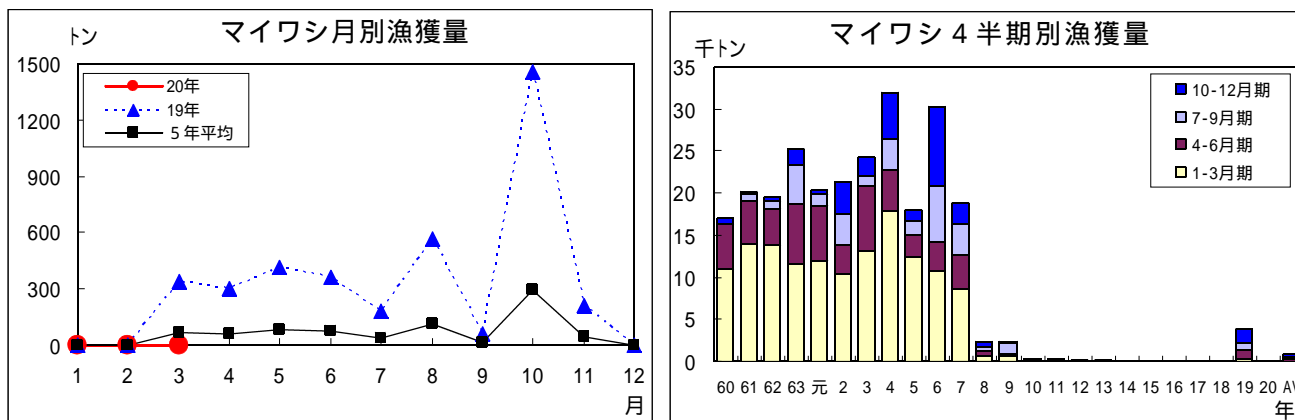


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年3月26日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成17年は3万5千トンでした。

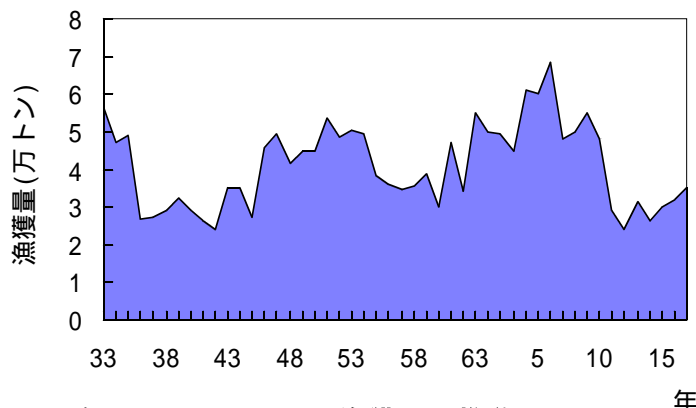


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で411.5トン(前年比77%，平年比169%)と、前年を下回ったものの平年を上回りました。北薩海域の棒受網でも68.8トン(前年比88%，平年比172%)と、前年を下回ったものの平年を上回りました。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

まき網では北薩海域・南薩海域とも中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となり、北薩海域の棒受網では期間の前半は中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体で、期間の後半は小～中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は好調だった前年を下回るものの、平年を上回るでしょう。

(根 拠)

今期の漁獲の主体となる1歳魚(平成19年生まれ)のまき網による水揚げが低調に推移しているものの、太平洋側の近隣県で漁模様が好調なことから、来遊水準は比較的高いと考えられます。

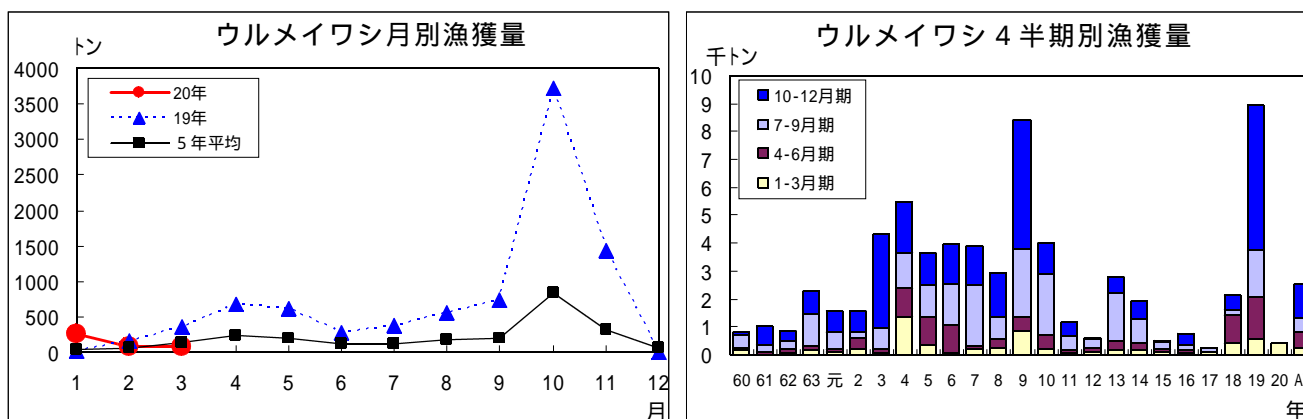


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成15～19年)の平均値，平成20年3月26日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

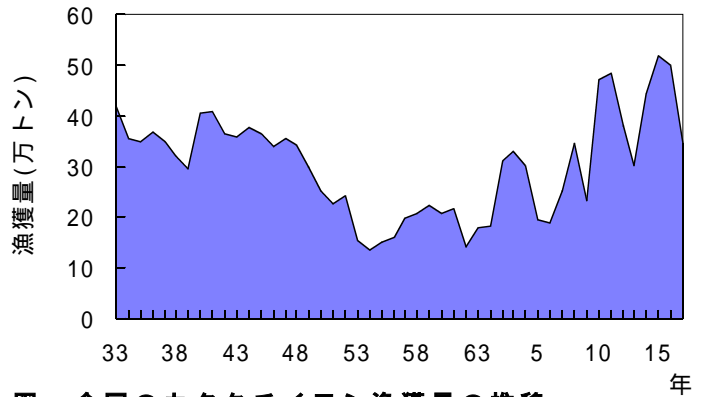


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成20年1～3月期の漁況の経過

【 4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で1,598.8トン(前年比263%, 平年比382%)の水揚げで、前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では222トン(前年比92%, 平年比173%)の水揚げで、前年を下回ったものの平年を上回りました。

まき網では中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ, 2歳魚・平成18年生まれ)を主体に好調に推移しています。

3. 平成20年4～6月期の見とおし

期間の前半は中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ, 2歳魚・平成18年生まれ)が主体で、後半は小～中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となり、前年・平年を上回るでしょう。
(根 拠)

中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ, 2歳魚・平成18年生まれ)の来遊量が好調に推移しており、来遊水準は高いと考えられます。また中～大羽銘柄を産卵親魚とする小～中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)についても、来遊水準は高いと考えられます。

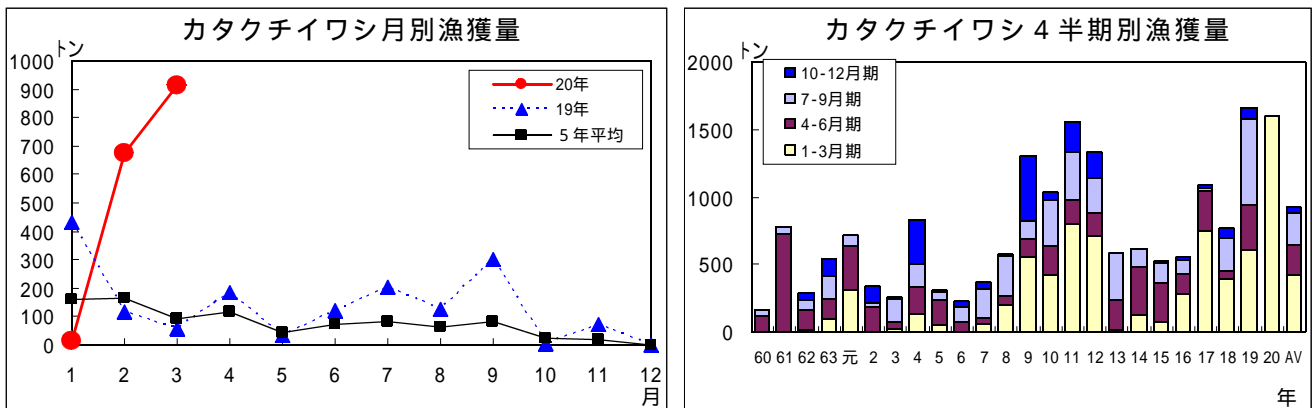


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成15～19年)の平均値, 平成20年3月26日までの水揚量を使用。

[イワシ類参考資料]

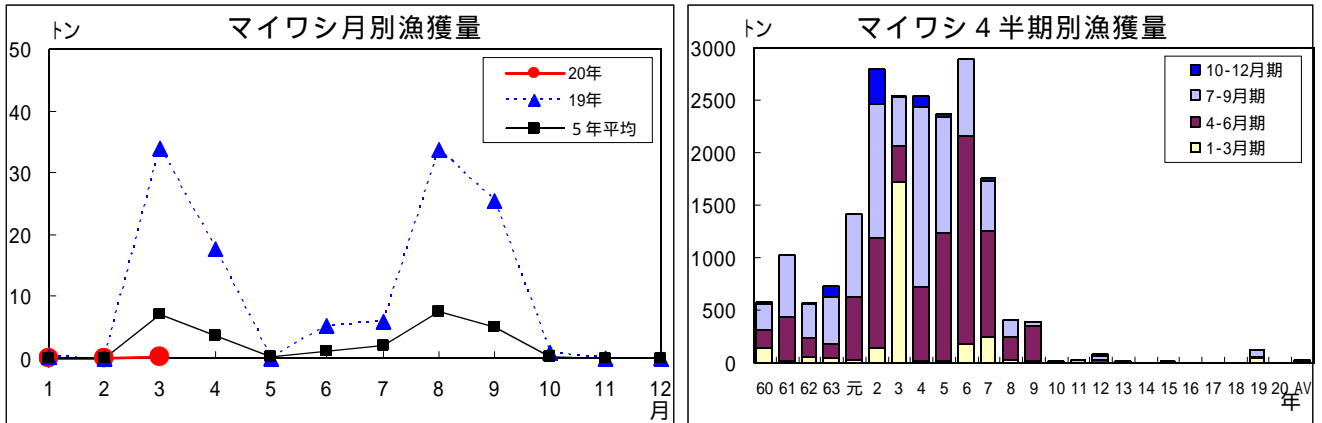


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

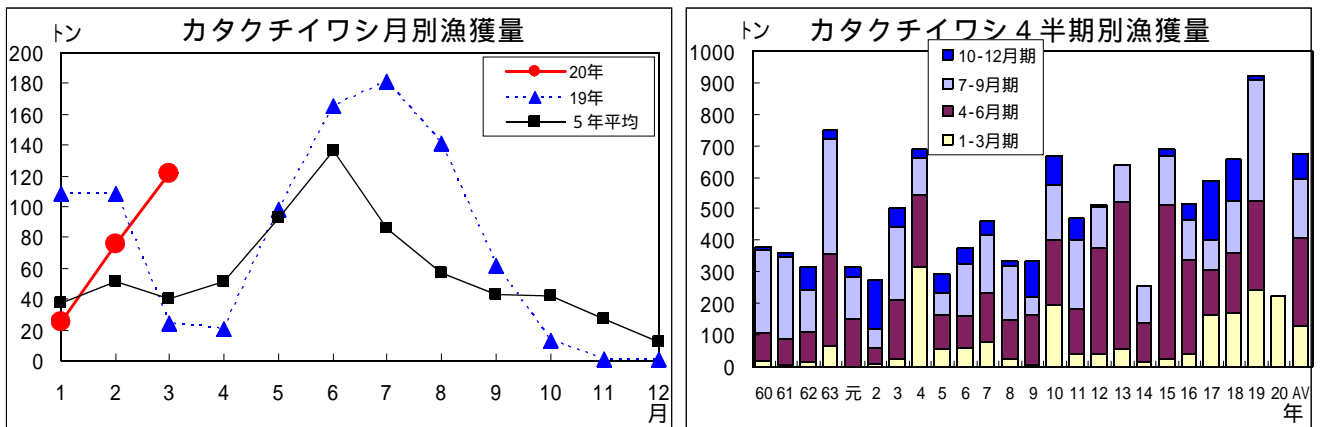


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

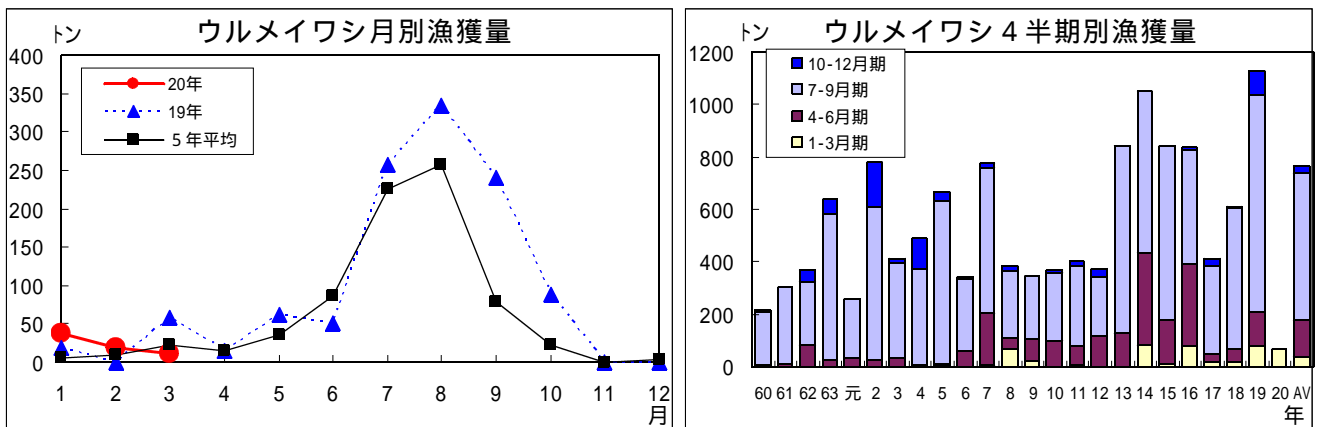


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年3月26日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

ムロアジ類（4港計）

1. 経年変化及び平成20年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成19年は18年より若干増加し2,655トンとなりました。

平成20年1～3月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり、期全体では346トンの水揚げで、前年の82%及び平年の49%でした。

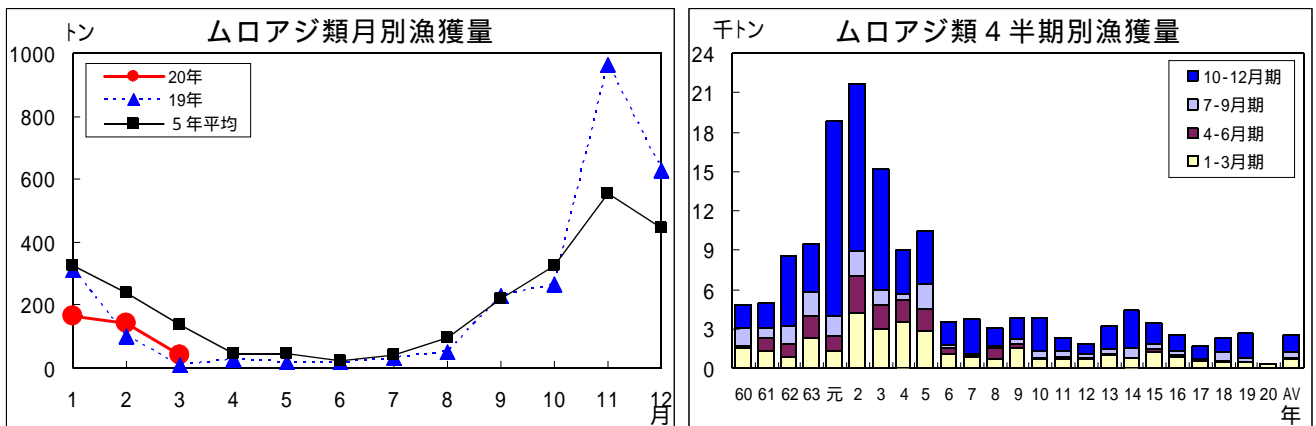


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

オアカムロ（4港計）

1. 経年変化及び平成20年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、平成19年は昭和60年以降最低の714トンとなりました。

平成20年1～3月は、主に志布志沖で漁獲があり、期全体では1,045トンの水揚げで前年の739%及び平年の260%と近年ではまとまった漁獲となりました。

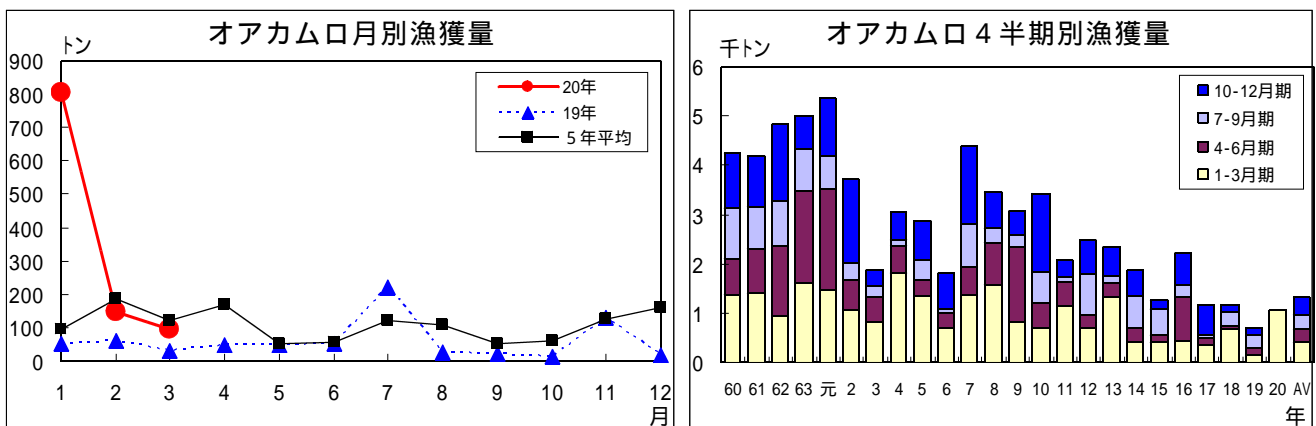


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年3月26日までの水揚量を使用。